

明日また

東光

角川書店刊

書名 明 日 ま た

著 者 今 東 光

発 行 者 角 川 源 義

東京都千代田区富士見町2~7
振替口座 東京 195208

発 行 所 角 川 書 店

印 刷 者 中 内 あ き 子

昭和38年8月15日初版発行

製 本 者 鈴 木 俊 一

落丁・乱丁本はお取替えいたします

中光印刷株式会社 株式会社鈴木製本所

著者との
申し合わせにより
検印廃止

定価 480 円

目 次

フリユートの聞える家

情熱の流れ

悪い思い出

人 心

買われた妻

恋しくば

ある家庭

女中の子

天使の眠る間に

梅千の感想

沈丁花

異邦人

見果てぬ夢

立つ鳥

セ

ハ

元

四〇

五

六

七

八

九

一〇

一一

一二

一三

一四

断絃の章

川のある風景

生い立つ記

姉の出現

渚

幕間

血 緑

戸 籍

相寄る魂

クリスマス・イブ

新 居

危険な遊び

幻想交響曲

円舞曲

一五

一六

一七

一八

一九

二〇

二一

二二

二三

二四

二五

二六

二七

二八

二九

流れ雲

三〇五

小夜曲

三六

断崖

三七

孤闌

三七

海の見える町

三八

節を曲げなかった

三八

開頭

三九

美しい逃亡者

四一

明日また

フリュートの聞える家

「昨夜、お宅お褒りありませんでしたか」

「はい。あたしどもでは別に」

「あら。そうでしたか」

「おや。何かありましたか」

麴町四丁目の屋敷町の勝手口で二人の主婦が白いエプロンをしたままで立ち話をしていた。

屋根の向うに女学校の校舎が聳え、それぞれの屋敷は相当な庭園をめぐらせているので、深い樹立ちが眺められる。屋敷町の昼下りは森閑として、人通りも途絶えているので、おしゃべり好きの二人の四十年増が立ち話をしても、さして気に留めなくても好い。

この隣り同士は平素はあまり仲が好くない。というのは一軒は化粧品店の銀座裏に持っている派手な商人だったし、もう一軒の方は国税局の相当の官吏なので隣りの派手な生活を苦々しく思っている家だ。そのくせ隣りの細君が仕立おろしの着物をきて、ハイヤーを呼んで出かけて行くのを見ると、女と生れたからには外出の度にシツケ糸を切るような着物を着たいと思い、それが出来ないだけに口もききたくないのだ。

どちらの家にも娘や息子がいたが、役人の方は自分の家の子供達の方が出来が好いと思っていた。商人の方は学校の教師なんてものは、金を呉れたり、贈物さえすれば、何とでもなるものだと思得ている。今までは万事それで押し通して来たからで、自分の家ぐらいの息子ともなれば曲りなりにも角帽をかぶせないと沽券にかかわると思うので、それもどうやら私立大学まで押し上げることが出来た。そんな睨み合いの家ながら、両家の主婦が勝手口まで這い出して立ち話をしているのだ。

「うちの裏で、昨夜遅く、塀を越える物音がしたんで、てっきり泥棒と思って女中がこっそり覗いたんですよ」

「あら。まあ。泥棒が入ったんですの」

「ですからお宅には何か被害がなかったかしらとお伺いするんですわ」

「宅では別条ございませんでしたが」

「そりゃよござんしたね。手前どもでも変なことはありませんのですが、たしかに塀を越した怪しい人影があったもんですから」

「裏のお宅じゃ遅くまでピアノや、珍しいことにフリュートが聞えたりして、何かにぎやかでしたか」

「そう。そう。何しろあの二号さんはハイカラさんですからね」

「昔は舟板塀に見越しの松というおきまりの寸法でしたが、

本当にあのお婆さんときたら、何所かのお嬢様みたいに綺麗で」

「あれじゃ、ちょっと二号さんに見えやしませんね」

「それで交番におしらせなさいまして」

「さあ。どうしたもんだらうと奥様と御相談してからと思ひましてね」

「それですわね。何にも被害がなかったら、それで好いんですけど」

「でも物騒ですわ」

「じゃ一言お知らせしたら」

「そうしましょうか」

二人の主婦は裏の家が氣に喰わない点で意見が一致した。

隣り近所から白い眼で見られている家というのは角屋敷で、低い石の門柱が立っており、それには長崎寓とだけ書いてある。

若い女主人と婆さんと二人暮らし。家賃は当時としてはびっくりするほど高く百五十円で、敷金は五百円だった。持主はこの家と背中合せになっている化粧品屋だ。その家主が貸してから（しまった）と思ったのは、まぎれもない妾宅と見たからで、これほどの美女を住まわせるからには、どすんとした大金持の旦那と踏むと、家賃の二百円ぐらいは惜しむ相手と思われなかったからだ。

その家へ夜中、塀を越えて怪しい人影が入ったのを、女中が湯殿で聞きつけ、裸のまま飛び出してのぞくと、黒い人影がひらりと裏の家へ飛び下りるのをたしかに見とけたのだ。「大変でございます。奥様」

寢室の傍で叫ぶ女中の声に、もしや火でも出したのかと主婦も寝巻の前のはだけるのも厭わず跳ね起きてきた。

「どうしたのさ。何が大変なんだよ。お風呂場でも燃えてるのかえ」

「いいえ」

「早くお言いよ」

奥さんは贅肉のついた年頃なので、せいせいと息が切れる。

「ど。ど。泥棒です」

「えつ。何処に」

と言いながら奥さんは血の気の引いていくのが自分にもよくわかった。茶の間まで出て来たものの台所の隅とか、湯殿の中とか、何所か暗いところにスッポンのように爛々と眼を輝やかせた泥棒が潜んでいるような氣がして、今にもへたへたと尻もちをつきそうになった。

「裏の長崎さんの塀を越えて、たしかに人間が入って行きました」

「うちの庭を伝ってかい」

「それがわかりません。あたくしがお風呂に入って居りましたら、板塀をかきあがる音がしたので、何だろうとお湯殿の

硝子戸を開けてのぞいたら、黒い影法師がひらりと庭へ飛び下りました」

「たしかに見とどけたのかい」

「はい」

「交番にとどけようか。飯田さんの戸締りが嚴重で入れなかったら、ついでに此所に来るかもしれないよ」

「でも灯が点いてると来ないと思います」

「今から寝入ったところへ入って来たら」

「そうでございますね。気味が悪うございますね」

「どんな風態だった」

「それが絵に描いたような泥棒じゃないんでございますよ」

「頬冠りして、しるし絆纏を着て、股引をはいた泥棒じゃない」

「はい」

「はい。洋服を着ておりました」

「今どきの泥棒は、みんな洋服なんか着込んでるんだよ。誰

が一見して泥棒様とわかるような風をするもんかね」

二人は改めて裏の闇を怯ず怯ずとすかして見るのであった。

さっく、さっく、と庭の落葉を踏む音がしたので、はっと

して美代子は枕をそば立てた。たしかに庭を人の足音がしている。しかしながら泥棒ならそんなところを歩く気つかいはないのだ。

間もなく自分の寢室の雨戸をこつこつとノックする音がし

た。美代子は立って行って

「誰」

と誰何した。

「僕ですよ」

「あら。忘れもの」

「話があるんだ」

「どうして玄関からいらつしやらないの」

「ジュリアン・ソレルは屋根伝いに訪問してますよ」

「あきれたわ」

美代子はくすりと笑うと、応接室へ行って、そつと窓を開けた。

黒い背広を着た奥村が楽器の入ったケースを抱えながら、脚からさし入れて跨いで入って来た。

「おう。凄……」

男は美代子が薄絹のネグリジェを着て立っているのをしげしげと見つめながら、ぼそつと言った。

「厭よ。そんなに見ちゃ」

しかしながら紙のように薄い絹の布れが身体にまといついて、ありありと女体の細部を浮彫りさせているのだ。

美代子は深々と安楽椅子に身体を埋めるようにしてかけた。「おかけになったら」

「ぼうつとして頭に来ちゃったよ」

と言いながら青年は外套も脱がずに傍の長椅子に腰をおろ

した。ガストーブが勢いよく燃えるので寒くない。彼は

「失礼した」

と詫びながら急に気がついたように外套を脱ぐのであった。

「お話って」

「まあ、そんなに急ぎ立てないで」

「だって、もう、遅いのよ」

「わかってます」

「女中達も寝かせたので、何にもおもてなしが出来ないわ」

「水割りは頂けるでしょう」

「飲まないとおっしゃれないという話ね」

「多分ね」

「仕様のないお方……」

美代子は、はらりと立つと応接間から出て行った。

自分の部屋に戻ると薄い羅紗地の部屋着を羽織ってから、

銀盆にジョニー・ウォーカーの黒ラベルと、冷蔵庫から氷を出して持ってきた。

「はい」

「どうも有難う」

「御自分でいいようにして呑んで」

「仰せの通りで」

彼は切子のコップに水と氷を入ると、それに黄金色の液体をたくさんと注ぎ込んだ。

「うまい」

「そうオ」

「ジョニ黒と来るからな」

彼は熱っぽい息を吹いた。

「さあ、おっしゃって」

「僕と結婚してくれませんか」

「まあ、藪から棒ね」

「それほど突然でもないでしょう。いつかは僕がプロポーズするとわかっていたでしょうがね」

「そうは自惚れてないわ」

「それじゃまるきり意地悪な返答ですよ」

「どうして。だって結婚出来ないくらいなのは御存知の筈よ」

「そりゃ表面の理由はそれに違いない。あなたは既に婚約してるんだから。でも彼の実業家との結婚は心から進んでないから、延び延びになってたんでしょう。だとすれば、いさぎよくそっちの婚約を解消して、僕と結婚して下さいよ」

「あなたの方の御事情だって簡単じゃないでしょう」

「そりゃ僕が宮内省の雅楽部に籍があるから、直属の楽部長の裁下を経なくちゃありませんが、それだって難しい問題はありませんよ。普通の男女の結婚と変りはない筈ですから」

「お家で黙って許すと思って」

「だから僕はせんだってから考えてたの。君との結婚を機にフランスに留学しようと思う」

「雅楽部の方は」

「退職しますよ。僕は君を連れてパリに行くんだ」

「素晴らしい新婚旅行ね」

「でしよう。僕はマルセル・モイーズに師事する。僕の家がたまたま笛の家だったので、フリユートを受け持ったが、どうせフリユートをやるからにはマルセル・モイーズぐらいの名手の弟子になって本格的な勉強がしたい。それには君が傍にいてくれたら、パリの苦学も苦にやならない」

「そううまく事が運べばね」

「馬鹿に悲観的ですね」

「この生活だって彼の仕送りよ」

「そりや当然じゃありませんか。三十歳も年が違っている親父さんが、孫みたいあなたと結婚したいからには、何にも惜しいことはないでしょう。このくらしいの生活を自由にさせて遊ばせておくのは何も贅沢のうちに入りやしませんよ」

「御近所じゃ。あたしのことをお婆さんだと思ってるのよ」

「誰だってそう思いますよ。僕だって、はじめはとうとう美代ちゃんも家のため、と言うよりはあの貪慾な一家のために二号になってしまったのかと慟哭したね」

「ちよつと。御言葉を慎しんで頂きたいわ。うちのお祖父ちゃんやお祖母ちゃんのこと、そんな風に言つて頂きたくないの」

「だって。僕だってあの人達を知ってるじゃないの。どれほ

ど慾の皮の突つ張った年寄りだっていうことは」

「それだって肉親となれば是非はないのよ」

「それが不服なんだ。あの人達のために、こんな生活をするなんて」

「と言うと若い彼はウイスキーの酔いも手伝つて、長椅子の肘掛けをどんと打った。

「あなたはわからないのよ」

美代子は指に光っている石を見ていた。

「僕は今夜、議論をしに來たんじゃありませんぜ。結婚を申し込んでるんですぜ」

「わかったわ。そのお話なら」

「それなら、その御返事を聞かせて下さいよ」

「あなたはあたしより三つ年下なのよ」

「それがどうかしたんですか」

「あなたはまだ二十四よ。だから分別が足らないのよ」

「ずっと此所一年あまり考え尽した結論ですよ。双方の家が普通の家庭と違っているの、問題は複雑だと思ったからこそ、僕はパリ留学という窮余の一策を思いついたんですよ」

「それが簡単すぎる結論だって言うんだわ」

「そうでしょうか。僕は今まで姉さんてばかり言つて來たね。實際、今までは姉さんのような気がしてたんだ。ところが僕がフリユートを吹くようになって、姉さんが美代ちゃんになったんだ」

「まあ。あたしとフリユートと関係があるの。おかしいわ」
 「ちつとも可笑しくないんだ。あなたとフリユートとは関係があるんだ」

「あたしにはわからない」

「僕は横笛やうきふえの家に生れました。小さい時からビー、ヒョロ、ヒョロと笛の音譜を耳にして育った。笛には敏感だった。按摩あんまの笛でも、笛の音がすると僕はじいっと立ちどまって聞いたもんだ。雅楽部に出仕した時は中学を卒業してからでした。笛をやるかたわら、洋楽もやるので当然フリユートを勉強させられることになった。フリユートを手にした時、日本の笛との明らかな相違は、結局、民族とその血液の相違という点から僕の勉強は始まった」

「まあ。はじめて聞いたわ一夫さんから」

「そうだったかしら」

「だって、あなたは真面目まじめめにそんなこと話したことなかったじゃない。いつだって可笑しな駄洒落だじゃればかり言ってる」

「ああ。あの駄洒落は楽人達から伝染したんだ。あの連中ときたら、あんなことばっかり言ってるんだよ」

「大体、あなた達は雲の上に近い人よ」

「そうかもしれない。それだからフリユートと対決する余裕があったのよ」

「どんな風に」

「僕は西洋人ぐらゐの肺活量を獲得しようと思いついたのさ。」

マルセル・モイーズの肺活量に接近し、肉薄するんでなかったら、フリユートなんか習ったって意味ないもの」

「そんなことが出来て」

「さあ。出来るかどうかわからない。僕は一生懸命つとめた。毎日、体操をした。フリユートの基本的訓練をした。すると見る見る僕の肺活量は増大した」

「そう言えば、あなたの胸囲は素晴らしいわ。日本人離れがしてるわ」

「それからフリユートを本気に勉強したんだ。パリに行つてマルセル・モイーズを先生と言えるようになるために」

そう言えば奥村一夫は先程までもモイーズの名を言いくらしたのを改めて美代子は思い返すのである。

その日の夕方から奥村は二人の友達をつれて美代子の家を訪れた。一人はピアノを、一人はヴァイオリンを携たづなえた彼の親しい仲間だということだった。

「時ちゃん。弾いてよ」

一夫はピアノ弾きに言った。

彼らは美代子のふるまうジョニー・ウォーカーですっかり真紅になり、盛んに駄洒落を飛ばしながら騒いだ。

「ああ。たまらない。その駄洒落だけ止めて。一夫ちゃん」

美代子は叱りつけるように言った。すると一夫はケースからフリユートを取り出し、時彦に催促した。時彦は美代子の

ピアノにむかうと蓋を開け

「やっぱりベヒシュタインのアプライトだと思ったよ」

と言いながら輝くような白い鍵盤をぽんぽんと弾いた。

「どうだい。荘厳な音がするな。こいつは」

「うむ。やっぱり素晴らしいな」

「何をやるの」

「マルセル・モイーズで、コッポラ指揮のあれさ」

「あ。あれか」

時彦は黒い鞆から譜面を出すとピアノの上にひろげた。愛治が譜をめくる役だ。

「何を聞かせるの」

「モーツアルトのフリーユート協奏曲第二番ニ長調さ。ほら。

モイーズが吹き込んでるだろ。モイーズのようにはいかなければ、このごろあの曲と取組んでるんで、今夜、聞いて貰おうと思うの」

「聞かせて頂くわ」

「若し及第したらパリ行きの決心も出来るんだ」

「大変なことね。しっかり及第するようにやって頂戴」

「ところがこの曲を勉強してから人前で演ったことが未だ一度もないんだ。恐らく時ちゃんも聞いてないだろう。愛ちゃんにも聞かせてないんだ」

「それじゃ今夜が初めての御披露ね」

「そうなんだ。あのモイーズのフランス的な華麗な演奏が耳

について、どうしても巧く弾きこなせないんだ。僕はいつものことモイーズを忘れようと思ったんだ。するとね。寝てからモイーズが聞えてくるんだ。軽妙で、華麗で、純真なモーツアルトが意地悪く僕の耳の中を歩き廻るんだ。それから夜中に起き上って、フリーユートを持って出かけるんだ」

「まあ。氣狂いね。何処へ行くの」

「家から出て野っ原に行くんだよ。そこで誰も聞いていないのをたしかめてから、あのニ長調を吹奏するんだ」

「あなたのところは杉並だから、近所で安眠妨害なんて怒られないわね」

「そう。まだ人家がまばらだろう。安心してフリーユートが吹けるのさ。僕は銀色をしたこのフリーユートを吹くと、モーツアルトが生きていたら吃驚するだろうなあと思うんだ。何故って、こんなにフリーユートが精巧になったのを知らないからさ。モーツアルトの時代には日本の笛みたいだったんだらう」

一夫はありありと日本の笛に対する嫌悪を示した。

「笛の家に生れたあなたが、そんなこと言っちゃいけないわ」

「僕は時々、奥村という笛の家に生れた宿命を呪いたくなるんだ。宮中の雅楽家というのは古い歴史を持つてるんだよ。たとえば多家などは神武天皇の第二皇子の神八井耳命から出ているんだ。この人が第二代の綏靖天皇の音楽師になったの

で雅楽部が出来たんだ」

「まあ。お兄様のために」

「そうじゃないんだ。綏靖天皇は第三皇子なんだ」

「それじゃ弟さんのために」

「そう」

「どういう訳なの」

「神武天皇には日向国からお連れになったお后に御子さんがあったのよ。その方が手研耳命というんだ。神武天皇は大和国を征服すると、新しいお后を娶られて、この方を皇后様になすった。その御腹にお二人のお子さんが出来たんだね。すると御兄の命が自分が皇位継承権があるというので、二人の弟を殺そうとなすった。そこで弟さんの方も黙っていられないので兄君を誅することにしたのさ。その時に兄の神八井耳命が肝心な時に顛えたんだ。すると弟さんが矛で手研耳命を刺し殺してしまったんだ。神八井耳命は大切な瞬間に顛えるようでは万民の君として不適格だから、弟君を位に就けて、自分は好きな音楽を以てお仕えしたんだ。雅楽部というのはそういう歴史を背負ってるんだよ」

「御立派じゃないの」

「爾来、楽部では和琴の家、笙の家、笛の家という風に代々世襲で伝えて来たんだ。そればかりじゃない」

「その他にも」

「あ。舞の家がある。その家も右舞の家というのは右の舞い

ばかりやる家柄だし、左舞の家というのは左の舞いばかりやる家柄なんだ。右舞の家の人が左舞をやることもない代りに、左舞の家の人は右舞を知らないんだよ。変だろー」「ちつとも変じゃないわ。伝統というのはそういうもんよ。だからあなたが日本の笛を嫌ったり、憎んだりしちゃ駄目よ」

「ところがモーツァルトが昔のフリーユートを嫌悪してるよ」

「モーツァルトは日本の笛を知らないじゃありませんか」

「そりゃ笛ってものは古代から人類の作った楽器の一つには相違ないさ。エジプト人は蘆笛を吹いたし、ギリシャの古い彫刻にも笛吹きが残っているし、ローマ時代には角笛が軍隊に使われていたし、恐らくフリーユートの原型は、ヴァイオリンや、ハーブシコードと共に音楽史でも重要な位置を占める楽器だと思うんだ。モーツァルトの生きていた時代まで、フリーユートは音もよくなかったし、不便だったし、信用の出来ない楽器だったらしいな。今日のように華麗で、清澄で、しかも精巧になったことは驚嘆すべきことだよ。だからモーツァルトが憎むのは当り前さ」

美代子は疑わしそうに首を振った。

「本当だよ。一七七八年二月十四日にモーツァルトはお父さんに手紙を書いてるんだ。その中で『我慢のできない楽器のために作曲していると頭が変になります』とまで言ってるんだ。どのくらいモーツァルトがフリーユートを憎悪してるかわ